

本の中のサツマイモ (2)

<山田尚二氏>

元・川越サツマイモ資料館長

いのうえ ひろし
井上 浩

1 薩摩藩『成形図説』の中の「甘藷」部分 (山田尚二氏の現代語訳)

はじめに

江戸時代の書物でサツマイモ関係の記事があるものはいろいろある。だが、学者とは違い、普通の人にとっては読みづらいものが多い。そこで鹿児島関係のものについて、できるだけわかりやすいものにすることを心がけながら世に出された本の中に、鹿児島県の山田尚二氏著の上掲小冊子がある。

同氏は1931（昭和6）年生まれ。鹿児島大学教育学部卒業後、鹿児島県公立高校の社会科の教師をされた。その後、西郷南洲

顕彰館長、鹿児島純心女子短期大学非常勤講師などを歴任されている。

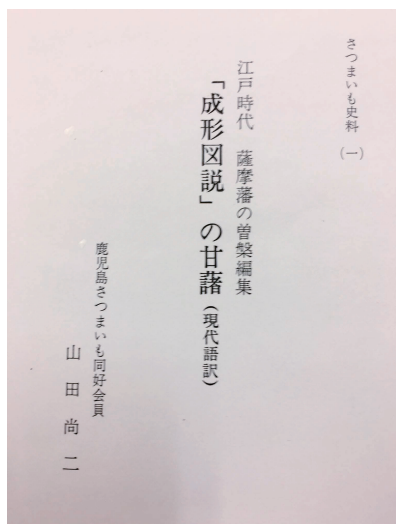
わたしは南洲顕彰館長時代の山田尚二氏に会いに行ったことがあるし、同氏もわたしのサツマイモ資料館長時代に、川越にきてくれている。

* 鹿児島さつまいも同好会のこと

1987（昭和62）年、鹿児島市に「鹿児島さつまいも同好会」ができた。その会員でもあった山田尚二氏は1993（平成5）年、会員などのためにと、薩摩藩の曾槃編集大百科辞書『成形図説』の中の「甘藷」の全文を現代語訳された。同会は、それを小冊子にして公刊した。

* 曾槃のこと

曾槃のことは、京都大学名誉教授・上野益三著『薩摩博物学史』（島津出版会、1982〈昭和57〉年）に詳しくある。それによれば、槃^{はん}の先祖は中国南部の福建省出身であった。槃は江戸時代初期の長崎に来て、1645年にそこで亡くなった帰化人、曾彦の子孫である。槃は1758（宝暦8）年、江戸で生まれ、江戸の本草学者として、また名医^{しげ}として有名になった。薩摩藩主・島津重豪^{ひで}は人を見る目を持っていた。賢明で学識豊かな槃の才能を愛し、自分の侍医にした。



「成形図説」の甘藷（表紙）

だが、実際には秘書として使った。槃を召抱えと、江戸の薩摩藩邸内に懸案であった大百科辞書『成形図説』の編集室を設けた。そして槃をその事業の総責任者にした。

槃にとっての、そこでの仕事は50年近くも続いた。だが運悪く、その間に2度もの大火災に遭った。1806（文化3）年と1829（文政23）年の江戸大火がそれで、薩摩藩の江戸の本邸も別邸も丸焼けになった。

『成形図説』の製版印刷は江戸でおこなわれ、その最初の30巻は大火以前の1804（文化元）年に、藩主・島津重豪に呈上されていた。その版木は土蔵に収蔵されていたので残ったが、編集室で書き溜めていたその他の原稿は灰になってしまった。槃は気を取り直して仕事を再開し、資料の再収集と原稿の執筆に明け暮れた。

ところが、その編集室が2度目の大火でまたまた全焼し、貴重な収集資料とそれについての原稿を失った。それで藩主構想の『成形図説』の目処もたたなくなった。そのときの槃はすでに73歳になっていた。その大火で自分の家も焼かれてしまった槃は、仮の私宅にこもり、75歳で亡くなるまでの2年間、君命の仕事を忠実に守り続けた。

上野益三先生の研究によれば、島津重豪が懸案としていた『成形図説』100巻のうち、刊行されたのは、同書の核心部分である最初の30巻であるとなる。サツマイモ関係者にとってありがたいことは、そのようにしてやっと何とか残った刊本の中に、「甘藷」の記事もあったということである。

「成形図説巻二十 五穀部 ^{カライモ}甘藷」の冒頭部分

「唐芋 これ専ら俗の通称なり。○^{から}加良

とは^{もろこし}西土を指せる言にて、書紀・万葉等に^{から}漢とも唐ともあり。又広く諸蕃の国々をも加良といへり」（8頁）。

ちなみにカタカナのルビは曾槃が付けたものである。ひらがなのルビと（ ）の中の文字は山田尚二氏が付けたものである。

上掲の文に続いて各地の呼び名がこうある。

「琉球芋 ^{イモ}筑紫・中国等の俗名なり。琉球にては^{タダ}単伊毛とのみ云う」「薩麻芋 関東あたりにて呼べり」（8頁）。

当時の薩摩藩内の甘藷には、さまざまな呼び名のものがあつた。赤芋・白芋・凡計・^け波仁須・^{はにす}二皮・^{フタカワ}二色・^{フタイロ}八里半・^{どんく}度奴久和宇・^{わう}人參芋・^{にんじんいも}山伏芋などで、それぞれに、その解説がある。その中でとくに目立つものに「八里半」があり、こうある。

「こはその味の最すぐれたるが、今半里にして^{イト}栗となるの隠語にいひなせるものぞ」（9頁）。

この「八里半」は、後に近畿地方や江戸に現れた焼きいも屋が、その看板にしたため、全国に広く知られるものになった。もっとも焼きいも屋たちは、それが当たり前のものになってくると「十三里」の看板を掲げるようになった。その心は、焼きいもは「クリ（九里）より（四里）うまい」ということであつた。

2 『さつまいも 伝来と文化』

山田尚二氏は『成形図説』の中の「甘藷」の項の現代語訳本を出された翌年、春苑堂の「かごしま文庫19」として上掲書を出版された。その中で、『成形図説』の甘藷の記述中、もっとも有名なところは以下の文だと強調されている。

「享保十七年（1732）壬子の歳、^{かいだい}海内大いに飢饉し、^{がひょう}餓^{より}孳多し、ひとり本藩（薩摩）は、甘藷を貯うるに頼て、餓えて死することを免れたり。これにおいて、命ありて江戸に上りければ、^{あわ}安房・^{かずさ}上総等の地に種させ玉ひし故、薩摩芋と唱へけるといへり」（14頁）。

ちなみに「^{がひょう}餓^{より}孳」とは、餓死者のことである。ときの將軍、徳川吉宗は西日本の大飢饉におどろき、膝元の関東でもサツマイモの普及を急がなければならなかったとした。そのとき、タイミングよく現れたのが江戸の町儒者・青木昆陽であった。

昆陽は中国の『農政全書』などに拠りながら、サツマイモの効用とその寒さに弱いものの栽培法を書いた『蕃藷考』を、名奉行として有名だった町奉行・大岡越前守忠相に託した。

將軍・吉宗は有能な大岡越前に町奉行だけでなく、関東の農政も長い間、兼務させていた。関東には幕府領が多く、その管理は代官たちに任されていた。大岡はその代官を巧みに使いこなしていたので、農政にも明るい人であった。

その関東は西日本の温暖なところとはまったく違い、冬が長く、その寒気も厳しい。それでも関東の代官の中には、享保の大飢饉前からサツマイモの種いもを、村の名主クラスの者に配り、試作をさせては結

果を報告させていた。だが、その代官たちがサツマイモは寒さに弱いものであることを知らなかったため、せっかくの試作奨励も失敗を繰り返していた。

それだけに大岡越前守は『蕃藷考』を読んで喜び、それをさっそく吉宗將軍に届けた。すると將軍も喜び、昆陽に関東での試作をさせることになった。

それで選ばれた試作地は江戸では幕府の御薬園内と、そこに隣接し、町奉行が管理していた養生所内の2か所であった。そのほかに町奉行の与力給地であった上総の不動堂村（千葉県九十九里町）と馬加村（千葉県市花見川区幕張）の2箇所があった。



「さつまいも 伝来と文化」（表紙）

この試作地の選び方からだけでも、ときの將軍や町奉行が関東でのサツマイモ栽培にどんなに強い関心をもっていたかがわかる。昆陽は失敗を許されない重圧の中での試作に挑戦し、見事、4試作地のすべてで成功して見せた。

昆陽はその功績により幕府に召抱えられたが、その試験で使った種いもは薩摩から

取り寄せたものであったとされている。その明らかな根拠は上記『成形図説』の「命ありて江戸に上がりければ」にある。

山田尚二氏著『さつまいも 伝来と文化』で特にありがたいことと言えば、和漢の甘藷関係文献の紹介になろう。たとえばそれは京都に多いとされ、京都の本草家・松岡如庵じょあんの『番藷録』（1717<享保2>年）と小野蘭山らんざんの『本草綱目啓蒙』（1803<享和3>年）を紹介されている。

前者の『番藷録』は享保17年の大飢饉以前にすでに書かれていたものである。近畿地方、特に京都・大坂は何事でも新しいものへの反応と消化が早かったところであった。それがサツマイモの導入の場合でも当てはまっていた。当時の近畿地方などのサツマイモ産地とその特色がこうある。

「京都の南部山城の邑及び和州（奈良県）木津、摂州（大阪市）天王寺の辺、紀州（和歌山県）・讃州（香川県）・肥前長崎には、

特に多く作りて都下四方へ出して（出荷販売）、これは万事薯蕷しよよくとことなるなし」（157頁）。

ちなみに「薯蕷」はヤマイモのことである。

後者の『本草綱目啓蒙』は文化・文政期の前年のものだけに、趣が前者とはかなり違う。

「甘藷 リウキウイモ（琉球芋） サツマイモ（薩摩芋） シマイモ（島芋）（讃州） トウイモ（唐芋）（肥前） カライモ（唐芋） ハチリ（八里）（ともに同上）」「本薩州より来たる。今は東国にも多く種うゆ」「甘藷中の上品の者は薩州にあり。方言ボケ。一名、アカバチリ（肥前） サツマバチリ（同上）この品甚だ寒氣おそを畏る。故に東国にてうう蒔るあたわず。その皮薄くして紫紅色、煮る時は、その肉色白くして黄ならず。味沙糖さとうの如し。又肥前にモチバチリ、サクラバチリあり。皆上品なり」（160～161頁）。